2023 ズバリ！的中

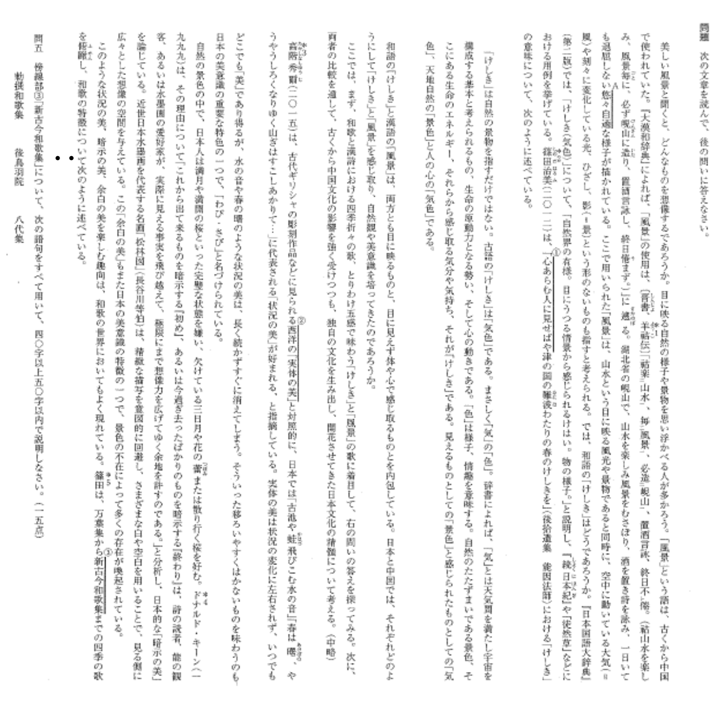
古文

北海道教育大学

ほぼ同じ設問です

入試問題

前期日程
問五



問題　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

美しい風景と聞くと、どんなものを想像するであろうか。目に映る自然の様子や景物を思い浮かべる人が多かろう。「風景」という語は、古くから中国で使われていた。『大漢和辞典』によれば、「風景」の使用は、（晋書、羊祜伝）「祜楽山水、毎風景、必造峴山、置酒言詠、終日不倦。（祜山水を楽しみ、風景毎に、必ず峴山に造り、置酒言詠し、終日倦まず。）」に遡る。湖北省の峴山で、山水を楽しみ風景をむさぼり、酒を置き詩を詠み、一日いても退屈しないA悠々自適な様子が描かれている。ここで用いられた「風景」は、山水という目に映る風光や景物であると同時に、空中に動いている大気（＝風）や刻々に変化している光、ひざし、影（＝景）という形のないものも指すと考えられる。では、和語の「けしき」はどうであろうか。『日本国語大辞典』（第二版）では、「けしき（気色）」について、「自然界の有様。目にうつる情景から感じられるけはい。物の様子。」と説明し、『続日本紀』や『徒然草』などにおける用例を挙げている。篠田治美（二〇一三）は、①「心あらむ人に見せばや津の国の難波わたりの春のけしきを」（後拾遺集　能因法師）における「けしき」の意味について、次のように述べている。

「けしき」は自然の景物を指すだけではない。古語の「けしき」は「気色」である。まさしく「気」の「色」。辞書によれば、「気」とは天地間を満たし宇宙を構成する基本と考えられるもの、生命の原動力となる勢い、そして心の動きである。「色」は様子、情趣を意味する。自然のたたずまいである景色、そこにある生命のエネルギー、それらから感じ取る気分や気持ち、それが「けしき」である。見えるものとしての「景色」と感じられたものとしての「気色」、天地自然の「景色」と人の心の「気色」である。

和語の「けしき」と漢語の「風景」は、両方とも目に映るものと、目に見えず体や心で感じ取るものとを内包している。日本と中国では、それぞれどのようにして「けしき」と「風景」を感じ取り、自然観や美意識を培ってきたのであろうか。

ここでは、まず、和歌と漢詩における四季折々の歌、とりわけ五感で味わう「けしき」と「風景」の歌に着目して、右の問いの答えを探ってみる。次に、両者の比較を通して、古くから中国文化の影響を強く受けつつも、独自の文化を生み出し、開花させてきた日本文化の精髄について考える。（中略）

＊3高階秀爾（二〇一五）は、古代ギリシャの彫刻作品などに見られる②西洋の「実体の美」と対照的に、日本では「古池や蛙飛びこむ水の音」「春は曙。やうやうしろくなりゆく山ぎはすこしあかりて…」に代表される「状況の美」が好まれる、と指摘している。実体の美は状況の変化に左右されず、いつでもどこでも「美」であり得るが、水の音や春の曙のような状況の美は、長く続かずすぐに消えてしまう。そういった移ろいやすくはかないものを味わうのも日本の美意識の重要な特色の一つで、「わび・さび」と名づけられている。

自然の景色の中で、日本人は満月や満開の桜といった完璧な状態を嫌い、欠けている三日月や花の蕾または散り行く桜を好む。＊4ドナルド・キーン（一九九九）は、その理由について「これから出て来るものを暗示する『初め』、あるいは今過ぎ去ったばかりのものを暗示する『終わり』は、詩の読者、能の観客、あるいは水墨画の愛好家が、実際に見える事実を飛び越えて、極限にまで想像力を広げてゆく余地を許すのである。」と分析し、日本的な「暗示の美」を論じている。近世日本水墨画を代表する名画「松林図」（長谷川等伯）は、精緻な描写を意図的に回避し、さまざまな白や空白を用いることで、見る側に広々とした想像の空間を与えている。この「余白の美」もまた日本の美意識の特徴の一つで、景色の不在によって多くの存在が喚起されている。

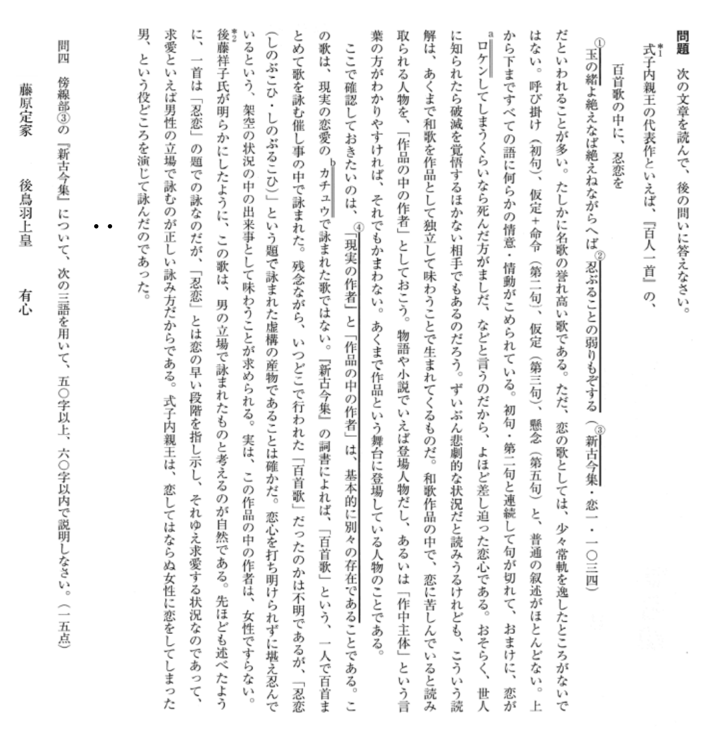
このような状況の美、暗示の美、余白の美を楽しむ趣向は、和歌の世界においてもよく現れている。＊5篠田は、万葉集から③新古今和歌集までの四季の歌を俯瞰し、和歌の特徴について次のように述べている。

問五　傍線部③「新古今和歌集」について、次の語句をすべて用いて、四〇字以上五〇字以内で説明しなさい。（一五点）

勅撰和歌集　　後鳥羽院　　八代集

河合塾

直前講習
道教大国語テスト
第二講　問四



問題　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

＊1式子内親王の代表作といえば、『百人一首』の、

百首歌の中に、忍恋を

①玉の緒よ絶えなば絶えねながらへば②忍ぶることの弱りもぞする（③新古今集・恋一・一〇三四）

だといわれることが多い。たしかに名歌の誉れ高い歌である。ただ、恋の歌としては、少々常軌を逸したところがないではない。呼び掛け（初句）、仮定＋命令（第二句）、仮定（第三句）、懸念（第五句）と、普通の叙述がほとんどない。上から下まですべての語に何らかの情意・情動がこめられている。初句・第二句と連続して句が切れて、おまけに、恋がaロケンしてしまうくらいなら死んだ方がましだ、などと言うのだから、よほど差し迫った恋心である。おそらく、世人に知られたら破滅を覚悟するほかない相手でもあるのだろう。ずいぶん悲劇的な状況だと読みうるけれども、こういう読解は、あくまで和歌を作品として独立して味わうことで生まれてくるものだ。和歌作品の中で、恋に苦しんでいると読み取られる人物を、「作品の中の作者」としておこう。物語や小説でいえば登場人物だし、あるいは「作中主体」という言葉の方がわかりやすければ、それでもかまわない。あくまで作品という舞台に登場している人物のことである。

ここで確認しておきたいのは、④「現実の作者」と「作品の中の作者」は、基本的に別々の存在であることである。この歌は、現実の恋愛のbカチュウで詠まれた歌ではない。『新古今集』の詞書によれば、「百首歌」という、一人で百首まとめて歌を詠む催し事の中で詠まれた。残念ながら、いつどこで行われた「百首歌」だったのかは不明であるが、「忍恋（しのぶこひ・しのぶるこひ）」という題で詠まれた虚構の産物であることは確かだ。恋心を打ち明けられずに堪え忍んでいるという、架空の状況の中の出来事として味わうことが求められる。実は、この作品の中の作者は、女性ですらない。＊2後藤祥子氏が明らかにしたように、この歌は、男の立場で詠まれたものと考えるのが自然である。先ほども述べたように、一首は「忍恋」の題での詠なのだが、「忍恋」とは恋の早い段階を指し示し、それゆえ求愛する状況なのであって、求愛といえば男性の立場で詠むのが正しい詠み方だからである。式子内親王は、恋してはならぬ女性に恋をしてしまった男、という役どころを演じて詠んだのであった。

問四　傍線部③の『新古今集』について、次の三語を用いて、五〇字以上、六〇字以内で説明しなさい。（一五点）

藤原定家　　後鳥羽上皇　　有心